

平成30年 5月31日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02118

研究課題名(和文) プロティノス美学におけるアイステーシスの位置づけ 受容と把握の機能をめぐって

研究課題名(英文) The Status of Aisthesis in Plotinus' Aesthetics on Functions of Reception and Apprehension

研究代表者

関村 誠 (Sekimura, Makoto)

広島市立大学・国際学部・教授

研究者番号：20269583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、プロティノスの美学思想における感覚の働きの特質を明確化するために、感覚作用が知的作用に連係して哲学構造に組み込まれる積極的な面をもつことの解明を、把握という概念等に関わるテキストの読解と解釈を通じて行った。感性的領域から知性的領域への移行の様態を、移行の出発点自体の重要性を見定めることで理解することを試み、その際、受動的な感覚と能動的な把握と関係に着目しつつ、魂の機能についての議論の分析と考察を遂行した。

研究成果の概要(英文)：In this research, I tried to examine specificity of sensitive function in Plotinus' aesthetic thought through analytical interpretation of his texts concerning apprehensive activity which is integrated into his philosophical structure and relates sense-perception and intellectual recognition. By clarifying dynamic relation between passive perception and active recognition, I attempted to scrutinize the soul's sensitive faculty and consider sense-perception as a necessary starting point for the apprehension of intelligible beings.

研究分野：美学

キーワード：感覚 プロティノス

1. 研究開始当初の背景

(1) 美学が感性論として論じられることが多くなってきた今日において、ギリシアの古典思想に遡って、感性の機能を再考することの必要に迫られている。しかし、とりわけプロティノス思想を美学的観点から、また感性論という側面からの考察することは充分とはいえない状況にある。美学の源泉に位置するプラトンから大きく影響を受けた新プラトン主義の哲学者として、プロティノスはプラトン思想に大きく依拠しながらも、感覚の働きの諸局面に関する分析と考察において、当時の思想状況の中で独自の議論展開をしている。この感覚機能についての考察は、今後さらに進められなければならないと言える。

プロティノスにおいて、プラトンにおけるのと同様に、感性で捉えられるものの次元は、知性で捉えられるものの次元よりも低く位置づけられていることは確かである。しかしながら、感覚機能は、魂の有する能力としてプロティノスの形而上学的な思索のうちに組み込まれている。魂が知性面と感性面の両面の働きを持っているため、感覚機能と知性活動との関係は、さらに明確にしていくべき課題となっている。

また、近年は、国内では新プラトン主義協会などの学会組織においてもプロティノス研究が以前にも増して推進されるようになり、また、海外でも、プロティノスの著『エンネアデス』の各論文の註釈にほどこされた研究書が複数刊行されつつある。プロティノス研究は活発化してきていると言える。こうした状況において、他の研究者の成果を参照しつつ、プロティノスの思想における、とりわけ受動的な感覚受容と能動的な把握の関係や連動性について研究を遂行することが可能であり、その成果を美学的思想として現代にも通じる感性的な経験を意味づけていく基礎論構築に寄与することができると考えた。

(2) 申請者は、プラトンの美学にかかわる思想を中心に研究してきたが、その中で、プラトン思想における感覚(アイステーシス)を巡る議論の展開について考察も行ってきた(平成21-23年度科研費研究)。その後、アイステーシス論の側面から、プロティノスの思想をとりわけプラトン哲学の受容の側面について考察してきた(平成24-26年度科研費研究)。こうした研究をもとに、プロティノスにおける感覚の機能の複雑な様相が意識されるようになった。感性と知性とを二元論的に分けるのではなく、受動的な受容と能動的な把握の関係や連動を巡る議論を追ってテキストを解釈し、先行研究を参照しつつ考察を進めることが可能であると判断した。

2. 研究の目的

(1) プロティノスにおける感覚の働きの

諸局面に関する議論において、当時の思想状況の中でいかに独自の展開をしているかを、テキスト批判を遂行して見極めることが本研究の目的である。感覚(アイステーシス)の働きが魂の知的作用に連係して哲学構造に組み込まれる積極的な面をもつことを解明し、それをプロティノス美学に位置づけていく。同時に、感性の働きの意義を評価する考察を展開していく。感性論としての美学の源流とその豊かな初期的展開の理論的基盤をより堅固なものにするとともに、現代における人間感性について反省するための基礎論としていく。

(2) とりわけ本研究では、知性面と感性面の両面に関わっていく魂の働きの様相を捉えることで、存在論的には低く位置づけられる感性的な働きがいかなる形でプロティノスの哲学構造に組み込まれていることをテキストに即して確認することに努めた。それにより感覚の働きの積極的な意義をその能動性の様態を分析を通じて理解し、「把握」という概念に着目しつつ知性的な働きとの連動性を明らかにしていくことを研究目的とした。

3. 研究の方法

(1) プロティノス思想のテキストである『エンネアデス』の古典ギリシア語原典を読解し感覚に関わる議論を分析検討して、和訳、英訳、仏訳を参照し、近年多数公刊されている各論文ごとの注釈書などを参考としつつ、プロティノスにおける哲学的営みに組み込まれている感覚(アイステーシス)の機能とその意味を明確にすることに努めた。その際に、プロティノスが感覚機能に関して、肉体性や情動に結びつく受動面と、それにとどまらず知性的働きに発展的に通じていく動態面とを区別し、かつその連動性を説いている箇所に着目することにより分析を進め、美の感覚知覚や芸術行為を理論づけるプロティノス思想の特徴を、浮き彫りにし、その意義を見極めようと試みた。

(2) プロティノスのテキストは、*Plotini Opera*, ediderunt P. Henry et H.-R. Schwyzer, Tomus I, 1964; Tomus II, 1977; Tomus III, 1982, Oxford Classical Texts のギリシア語原典を用いる。邦訳は中央公論社刊の『プロティノス全集』(全4巻+別巻)を主に参照し、適宜、A.H. Armstrong による英訳(Loeb Classical Library)および E. Bréhier による仏訳(Les Belles Lettres)、L. Brisson を中心とする研究者による詳しい註付きの仏訳(GF-Flammarion)が最近すべて揃ったのでそれを用いた。プロティノスの第1論文「美について」については、2007年には *Plotin, Traité 1 (I-6)*, introduction, traduction, commentaires et notes par Anne-Lise Darras-Worms, Les Éditions

du Cerf, Paris、2012 年には *Plotin, Œuvres complètes, Introduction, Traité 1 (I-6), Sur le beau*, introduction, traduction et notes par Martin Achard et Jean-Marc Narbonne, Les Belles Lettres, Paris が刊行されており、それらを参考にした。

(3) 感覚機能と知性機能をつなげる働きとして魂における「把握」という概念の有する意味を明らかにすることに努めた。

4. 研究成果

(1) プロティノスの思想において、感覚機能が不可欠なたちで、彼自身の哲学構造に組み込まれているかを明確にするために、第1論文「美について」における美の内在性に関する議論を解釈し、その特質を明らかにして、感覚機能の位置づけを行なった。その際、感覚対象と知性対象の関係についてのプラトン解釈を振り返りつつ、プロティノスのテキスト読解を行なった。知性界の美を主題としている第31論文「直知される美について」における内的な美の議論も参照しつつ、とりわけ、プロティノスが形(エイダス)をどのように捉えていたかについて、感覚対象としてのエイダスと知性対象としてのエイダスとの関係を明確化することに努めた。感覚がプロティノス思想の中で果たす積極的な面を、魂の「判断」の能力遂行との関連で考察した。

(2) 「把握」(アンティレープシス)の概念が、いかに「感覚」(アイステーシス)の機能との関連で働いているかについて、第1論文「美について」および第53論文「生命あるものとは何か、人間とは何か」のテキスト読解をもとに考察した。感性と知性との間の連動を、「把握」の様態を分析解釈して明確にすることによって捉ようと試みた。

(3) プロティノスの感覚的な表象機能と知性的な把握との関連性について考察が、芸術活動を理解するための一つの重要な基礎的な視座を提示しうることを主張した。具体的には、プロティノスの感覚機能についての議論の現代的な意義を見極めるために、ミシェル・アンリのカンディンスキー論との比較考察も遂行した。プロティノスにおいてもアンリにおいても、見えないレヴェルと見えるレヴェルでの形の関連づけの議論があり、見えない形が見える形の先行するとみなす思想があることが確認でき、形に関わる感覚と美の内在性についての反省が現代の芸術についての探求でも必要とされうるテーマであることが確認できた。あらためて、プロティノスの思想が現代とも響き合う側面を有することを再認識することができた。また、美をその内在性において捉えるプロティノスの思想は、日本文化における自然観やそれを基礎にしてギリシャ彫刻を鑑賞する和辻哲郎の思想とも比

較しつつ論じ得る側面があることを見出すことができた。

(4) これまでの、プロティノス美学における感覚の働きを知性的機能と結びつける研究の中で、プロティノスにおける「型」や「痕跡」の機能をより全体的な視点から彼の思想の中で位置づけて究明していく必要があることを強く意識することとなった。今後さらに継続してプロティノス思想の美学的側面について研究遂行する際に、この切り口でさらに考察を深めていくことができると思われた。

(5) 研究成果を、下の項目に記した国内・国外の研究者の集う学会等で発表することで、上記(4)の点など有益な示唆を得ることができた。またその発表をもとにした論文を公にすることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

関村誠、「プロティノスの美の理論におけるエイダスとミシェル・アンリのカンディンスキー論におけるフォルム」、『ミシェル・アンリ研究』7、2017年、pp. 41-61、日本ミシェル・アンリ哲学会編、

(DOI: 10.20678/henrykenkyu.7.0_41)

関村誠、「Immanence of beauty and sensitive function in Plotinus」(「プロティノスにおける美の内在性と感覚機能」)、Proceedings of ICA 2016、(第20回国際美学学会論集)pp. 460-464、2017年 Seoul National University, Korea

〔学会発表〕(計 6件)

関村誠、「La sensation de la forme chez Plotin et Watsuji」(「プロティノスと和辻における形の感覚」)、La Sicilia nel contesto della civiltà europa e Mediterranea (学会「地中海文明を背景とするシチリア」)、Palermo, Italia, 2015年5月22日、Palazzo Steri, Palermo, Italia パレルモ(イタリア)

関村誠、「ミシェル・アンリのカンディンスキー論におけるフォルムとプロティノスのエイダス」、日本ミシェル・アンリ哲学会第8回大会、2016年6月11日、龍谷大学大阪梅田キャンパス

関村誠、「Immanence of beauty and sensitive function in Plotinus」(「プロティノスにおける美の内在性と感覚機能」)、20th International Congress of Aesthetics(第20回国際美学学会)、2016年7月26日 Seoul

National University, Seoul, Korea ソウル国立大学、ソウル（韓国）

(4)研究協力者
()

関村誠、« Sensation et beauté dans les pensées japonaise et occidentale » (「日本と西洋の思想における感覚と美」), XXXVIe Congrès de l'Association des Sociétés de Philosophie de Langue Française (A.S.P.L.F), 2016年8月24日, Iasi, Roumanie(第36回フランス語哲学国際連合大会)、ヤシ(ルーマニア)

関村誠、« Sensation et intellection dans la pensée de la beauté chez Plotin » (「プロティノスの美の思想における感性と知性」), Séminaire de philosophie, Faculté de Philosophie, 2017年3月10日, Institut Catholique de Toulouse, France (哲学セミナー、トゥールーズ・カトリック学院大学哲学部)、トゥールーズ(フランス)

関村誠、« Sense-perception and Apprehension of Forms in Plotinus » (「プロティノスにおける美の形の感覚と把握」), The Fifth Logos and Arete Conference: Aesthetic Perception and Moral Sentiment in New Perspective (第4回ロゴスとアレテー学会「新たな視点からの美的知覚と倫理感情」), 2017年5月20日 Philosophy Department of Chinese Culture University, Taipei, Taiwan 中国文化大学、台北(台湾)

〔図書〕(計 1 件)

関村誠、« La sensation de la forme chez Plotin et Watsuji », Le filosofie de Mediterraneo e della Magna Graecia, a cura di Piero Di Giovanni, Italia, 2015, pp. 57-65. (イタリア)

6. 研究組織

(1)研究代表者

関村 誠 (SEKIMURA MAKOTO)
広島市立大学・国際学部・教授
研究者番号：20269583

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：